

教 育 長 就 任 挨 拶

と き：4月30日（木）10：30～

と ころ：教育委員会室

この度、教育長に就任いたしました小玉です。教育長という大役を賜り、身の引き締まる思いであります。

前任の佐藤教育長と私は、二十代のころより、人事課、行革課などでご一緒し、また、同じ十勝出身というご縁で、かれこれ30年以上、温かく、叱咤激励、助言をいただけてきました。

佐藤先輩のご遺志を継ぎ、また、歴代教育長の足跡をしっかりと踏みしめ、本道教育の充実・発展のため、精一杯、取り組んでまいります。

私の道職員人生は38年目に入り、19回の異動を経験しましたが、教育委員会での勤務は初めてとなります。

もともと、同じ課に2度勤務したことがないので、いつも、初心に帰って、経験豊かな現場の皆さんのお知恵と想いを起点に工夫・カイゼンに努めてきました。

20代の頃から、どの職場に行っても、一貫して大切にしている考え方があります。

「金を残すのは三流、名を残すのは二流、人を残すのが一流」という人事課の教えです。

明治・大正期の政治家、医師でもあった後藤新平先生も同じ趣旨の名言を残しています。

どんな職場においても、そこにいる人々の中にある能力、可能性を外に引き出すことが求められています。

「教育“エデュケーション”」の語源をひもときますと、ラテン語で“外に引き出す”という意味になるそうです。

「教育は、人々の多様な個性・能力を外に引き出し、開花させ、社会全

体の発展を実現する基盤」であると認識しております。

このような姿勢で、北海道の未来を創造する、人材の育成に臨んでまいりたいと考えています。

新体制の始動にあたり、課題を申し上げます。

皆さんは、これまで、前・佐藤教育長のリーダーシップの下、高校教育の遠隔授業をはじめ、学校における働き方改革の推進、道立高等学校長の庁内公募など、まさに国内の教育行政をリードする施策に取り組んできたと同っています。

とりわけ、新型コロナウイルス感染症が全世界に拡大し、道内における感染者数が増加する中、全国に先駆けて、学校の一斉休業や分散登校を実施するなど、全職員が一丸となって、感染拡大防止に尽力されたことに心から敬意を表します。

先ず、当面の喫緊の課題は、道内でもまん延が広がる新型コロナウイルス感染症拡大への取組になります。子どもたちの命と健康を守ることを前提としながらも、やむなく学校休業を続ける中で、「学びをとめない」「心が近づく」環境を整えることが重要となります。

地域の事情によって、アクションは異なるかもしれませんが、熱意とアイデアをどんどん私に届けていただきたいと思います。

私たちは、次々と押し寄せる変化の波の中で、一人ひとりが未来を見据え、また、逆に未来から今を見て、新しい変革にチャレンジをしていかなければなりません。自らを、壊し・創造するサイクルを回すことによって、道民の期待に応え続けることができると思います。

とはいえ、実際に先進的な取組を発案すると、「効果や失敗しないこと」に関し、過酷な証拠を求められ、「何もしない人」の安全性に比べ、「挑戦するストレス」の大きさに不満を感じているのではないかと思います。

私としては、たとえ、あらかじめ成果を見通せなくても、「課題を見

つけられる」ような、チャレンジは積極的に応援してまいりたいと考えています。

次の課題は、「A I時代に向けて教育行政はどのように向き合うべきか」ということです。

近年、A Iやロボット、I o Tなど新しい技術が急激に進化しています。第4次産業革命と言われる、産業構造の転換や「SOCIETY5.0」などの未来社会の到来が見込まれ、将来的にはA Iやロボットによる職業代替の可能性が指摘されています。

こういった具合に、多くのビジョンに掲げられています。どれも成長戦略の文脈で提唱されているので、教育行政との関連性はぴんとこないのではないかと思います。そこで、A I時代に向けて、私から皆さんに知っておいてもらいたいポイントを2つお話しします。

一つ目として、“なぜ”A Iなどが必要か、その理由です。

それは今から取組を進めないと、将来、私たちがやるべき仕事ができなくなるからです。

さきほど、未来から今を見てなすべきことを考えてほしいといたしました。20年後の未来、2040年になると、いわゆる団塊ジュニア、つまり今の48歳前後の世代が大量にリタイヤします。しかし、それを埋める新卒者は、半分しか就職してこない時代がやってきます。すなわち、圧倒的に今より、手薄になるわけですから、格段に業務を省力化する準備を、もう始めなければ、後輩たちがもたないということです。

二つ目のポイントは、A I時代の産業社会に求められる人物像についてです。

2045年頃には、A Iが人間の知性を超える「シンギュラリティ」＝特異点を迎えると予想されています。その頃には、高速で効率的、大量、画一、同質、総じて価格競争の激しい仕事の多くがマシーンあるいは新

興国に置き換えられてしまいます。

一方で、人間本来の感性に訴える、たとえば、やさしさ、いやし、かっこいいといった質の高さや多様性に強みをもつ商品やサービス、コンテンツが相対的に価値を高めます。おそらく、命を持たない機械では提供できない、「心」の教育がより重視されることになるでしょう。

ところで、ITに対し苦手意識を感じている人も多いかもかもしれません。

でも、私なんかの世代でもこの半世紀、振り返りますと、黒塗電話から、ポケベル、携帯、スマホ、タブレットへとなんだかんだ便利なので、なじんできました。これからも、“とりあえず使ってみる”、“子供や若者に聞いてみる”習慣をつければ、絶対に何とかできます。

「学びの喜び」と「好奇心」を持ち続けることで、「生涯学習」が輝き、「青春」は続くと考えています。

次に皆さんとのコミュニケーションを大切にしながら、これから申し上げる、3つのワーク、「ヘッドワーク」、「フットワーク」、「チームワーク」を意識していただきたいと思います。

一つ目のワークは、「ヘッドワーク」。

教育現場においても、もはや、これまでの常識やマニュアルに囚われない発想と創意工夫がなければ、変化のスピードに対処できなくなっています。

いま私たちに求められることは、柔らかか頭^{あたま}で、「想像力」と「構想力」を駆使し、数歩先を見通し、創意工夫をこらした取組を加速することです。

そして、私から、もう一つ付け加えたいことがあります。

最近の常識や前例にはとらわれないでほしいのですが、もっと、長い目でみた常識や前例は結構、参考になります。

今日の社会制度や施策は、右肩上がりの人口と税収の増大を背景に構

築されたもので、右肩下がり時代に入って行き詰ってしまったというのがほとんどです。

だから、人口が増えていなかった時代の共助・互助システム、インフラ整備や資金の集め方、環境保全や資源の循環利用などの手法や流儀を、ひも解いてみると、案外、解決のヒントが見つかると思います。

もちろん、そのまま昔のやり方は通用しませんので、そこで登場するのが距離とコストの制約を取っ払う、ICTの活用です。

ぜひ、皆さんとわくわくするような解決策を一緒にヘッドワークしましょう。

二つ目のワークは、「フットワーク」。

これまでも仕事を通じ、現場にこそ課題解決の答えがあると痛感してきました。

政策や業務を実行する現場、現場がそれぞれの実情やニーズを把握し、共に考え、汗を流すということに改めて、重みをおいてほしいと考えています。

しばしば、国や道庁と振興局、市町村、保護者、市民団体、企業と連携しましょう！という掛け声がかかりますが、皆さん、「どうやって？」と疑問に感じるのではないかと思います。

答えは現場の皆さんが、関係者に足を運ぶしかありません。

そうすると相手の課題や持っている経営資源がわかり、何を頼めるか、一緒に何ができるかが見つかります。

子どもたちの成長に情熱を注ぐ、皆さんのご提案であれば、きっと相手も心強く感じ、互いの危機を同時に突破するコラボレーションが実ります。

三つ目のワークは、「チームワーク」。

昨年のラグビーワールドカップにおける日本代表大躍進の背景には、「ワンチーム」の精神で、果敢に挑戦してきたことが挙げられます。

私も高校時代、ラグビー部に所属しておりました。

ラグビーというのは、後ろにボールを送って前進するという矛盾を抱えたスポーツです。自分は敵にぶつかり倒れますが、後ろからくる仲間に生きたボールを渡し、ゴールをめざします。特に「オフロードパス」がこじ開けたトライシーンには、心打たれます。

たとえ、一人の力ではゴールにたどり着けなかった場合でも、信じた行動を起こし、仲間につないでください。

もう一つ、ラグビーの特徴は選手の体格やパフォーマンスがバラエティに富んでいることです。一人一人が違う力を出すことで、全体が強みを発揮します。作戦からメンバーを人選する場合がありますが、人材から作戦を組み立てることもあります。

今後、様々な危機を乗り越えるために、横断的な、事務分掌を超えた「チーム教育庁」「チーム教育局」の活躍を願っていますが、メンバーの個性と潜在力が輝く「ワンチーム」となって、トライを重ねていただきたいと願っています。

終わりになりますが、新型コロナウイルスとの未曾有の戦いは先行きが見通せない状況が続いています。

大災害や事故など衝撃的な出来事が心の傷になってしまふことがあります。逆に関心を促し、「生きる力」、「社会を支える力」を伸ばす事例も報告されています。

このことは、多様化・成熟化した社会経済システムや未知の危機に対応する力を蓄えるチャンスになると思います。

今後、できるだけ多くの職場に足を運び、あるいはオンラインで、皆さんの夢や熱意、悩みの中にある答えを掘り出し、その地域の特性や制約の中で「何が最適か」一緒に考えることができる日を楽しみにしています。

ともに頑張りましょう。よろしく申し上げます。